

2026(令和8)年度 学校推薦型選抜入学試験問題

基礎教養テスト

(時間 60分)

受験上の注意事項

- 【1】 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 【2】 受験票及び机上の受験番号シールに印刷された受験番号及び氏名が間違っていれば、速やかに監督者に知らせなさい。
- 【3】 この問題冊子は、本文が32ページあります。
問題冊子の印刷が不鮮明であったり、ページが落丁・乱丁していたり、解答用紙に汚れ等があったりする場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 【4】 机には受験票・筆記用具及び時計等監督者から指示された物以外は置いてはいけません。
- 【5】 監督者の指示があるまで退室はできません。
- 【6】 解答用紙の解答科目欄の「基礎教養テスト」にマークしなさい。マークされていなかったり、複数の科目にマークされていたりする場合は、採点できないことがあります。
- 【7】 解答用紙については、特に次の点に留意しなさい。
- ① マークには必ず黒鉛筆（HB）を使用しなさい。
 - ② 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の（例）のように解答欄ウの③にマークしなさい。
- (例)
- | | 解 答 欄 | | | | | | | | | |
|---|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ウ | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ |
- ③ 折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
- ④ 解答用紙には、答案に関係のない語句・記号を書いたり、落書きをしたりしてはいけません。（問題冊子には書き込んでもよい。）
- ⑤ 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消して書き直しなさい。
- 【8】 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問

A 次の【a】～【e】で、下線部のカタカナを漢字に改めたときに正しいものを、それぞれ①～④の中から1つずつ選べ。解答欄は【a】は 、【b】は 、【c】は 、【d】は 、【e】は

【a】 私は「あっちゃん」というアイショウで呼ばれている。

- ① 相性 ② 哀傷 ③ 愛称 ④ 会唱

【b】 ソガイ感にさいなまれる。

- ① 阻害 ② 素概 ③ 祖該 ④ 疎外

【c】 シコウ的に導入して効果を検証する。

- ① 至高 ② 施工 ③ 試行 ④ 志向

【d】 組織を管理する権限をイジョウする。

- ① 委譲 ② 異状 ③ 移乗 ④ 居城

【e】 タイセキ作用で新たな地層が形成される。

- ① 堆積 ② 対積 ③ 体積 ④ 滞積

B 次の【a】・【b】の各群の中で、反対語の組み合わせとして正しくないものを、それぞれ①～④の中から1つずつ選べ。

解答欄は、【a】は 、【b】は

【a】

- ① 委細 — 概略
- ② 陥没 — 隆起
- ③ 偶然 — 絶対
- ④ 拡大 — 縮小

【b】

- ① 促進 — 抑制
- ② 需要 — 供給
- ③ 浪費 — 儉約
- ④ 名誉 — ぼんかい挽回

C 次の【a】～【c】の□に正しい漢字を入れて、それぞれの四字熟語を完成させよ。漢字はそれぞれ①～④の中から1つずつ選べ。

解答欄は、【a】は 、【b】は 、【c】は

【a】 □方美人

- ① 四
- ② 六
- ③ 八
- ④ 十

【b】 不撓不□
とう

- ① 立
- ② 屈
- ③ 問
- ④ 克

【c】 傍若□人

- ① 無
- ② 不
- ③ 武
- ④ 部

D 次の【a】～【d】の下線部に最も近い用法のものを、それぞれ①～④の中から1つずつ選べ。

解答欄は、【a】は 、【b】は 、【c】は 、【d】は

【a】 明日こそは早く起きようと思った。

- ① 君、早く列に並ぶように。
- ② どうかお大事になさいますよう。
- ③ 彼のような人になりたい。
- ④ この一週間の振り返りをしようかな。

【b】 私は広島県で就職先を探したいと考えている。

- ① たくさんの子どもたちが遊んでいる。
- ② 今度は私の家でパーティーをしよう。
- ③ 彼の家はこの一帯でも有名な豪邸である。
- ④ 私が頼んだのはパフェであなたが頼んだのはプリンだ。

【c】 もうすぐ立冬なので暦の上では冬になる。

- ① 朝からそんなに騒ぐなといわれた。
- ② 大きなキノコが採れてうれしい。
- ③ これこそがここで暮らすための知恵なのだ。
- ④ そんな話があったなんてびっくりだ。

【d】 手紙は机の上に置いてある。

- ① 寒いのに犬はいつも元気だ。
- ② 静かに待つようにと指示を受けた。
- ③ いかにも大学教員らしい見たくをしている。
- ④ 今、大学の教室内にいます。

E 次の【a】・【b】の空欄に入る最も適切な故事成語を、それぞれ①～⑧の中から1つずつ選べ。解答欄は、【a】は 、【b】は

【a】 知人はチェスの世界大会に出場し、()で次々に勝利を重ねていった。

【b】 私たちの草野球チームは急ごしらえで統率も取れておらず、ただ集まっただけの()にすぎない。

- | | | |
|------------------------|---------------------------|-----------------------|
| ① 井の中の蛙 ^{かわず} | ② 断腸の思い | ③ 烏合の衆 ^{うごう} |
| ④ 竹馬の友 | ⑤ 破竹の勢い | ⑥ 会稽の恥 |
| ⑦ 出藍の誉れ | ⑧ 刎頸 ^{ふんけい} の交わり | |

F 次の【a】・【b】の意味を表す言葉として最も適切なものを、それぞれ①～⑥の中から1つずつ選べ。解答欄は、【a】は 、【b】は

【a】 巨視的であること。物事を全体的な大きい視点でとらえること。

【b】 小説や脚本などの筋。

- | | | |
|---------|----------|--------|
| ① プロット | ② マクロ | ③ ログス |
| ④ アナロジー | ⑤ ダイナミズム | ⑥ エスプリ |

G 次の①～⑧の中で、誤り（誤字や誤用、誤表記等）を含むものを3つ選べ。

ただし、解答の順序は問わない。解答欄は、

テ

～

ナ

- ① 仮にずっと努力してきたので目標を達成できるだろう。
- ② 今年の新入社員には目端が利く人が多い。
- ③ ずっと立ち続けていたので足が棒になった。
- ④ 大きな水槽の中でたくさんの金魚が泳いでいる。
- ⑤ レシピにはバター 20 g 弱と書いてあるので 22 g 入れた。
- ⑥ 誠意をもってお客様に対応して信頼関係をきづいていこう。
- ⑦ お食事をご用意しましたのでどうぞ召し上がってください。
- ⑧ 旧知の友を助けるためにも私が一肌脱ごう。

第2問

A 次の会話文を完成させるために、空欄 ～ に入れる最も適切なものを、それぞれ ① ～ ④ の中から1つずつ選べ。解答欄は、問1は , 問2は , 問3は , 問4は , 問5は

問1 A: What time should we meet tomorrow?

B:

A: Fine. I'll see you at the station then.

- ① I like the afternoon.
- ② Tomorrow is Sunday.
- ③ How about one o'clock?
- ④ The station is nearby.

問2 A: Do you understand this math problem?

B:

A: OK, let me explain it again.

- ① Yes, math is difficult for me.
- ② I don't think it's a problem.
- ③ Yes, I like math.
- ④ No, I don't understand it.

問3 A: Was your English test OK?

B:

A: Good job! You studied very hard.

- ① The test was yesterday.
- ② I'm confident I did well.
- ③ English tests are important.
- ④ I couldn't finish in time.

問4 A: A new supermarket opened near my house yesterday.

B: That sounds convenient! How is it?

A:

- ① It's too far away.
- ② I haven't been there yet.
- ③ It's due to open soon.
- ④ The convenience store is too expensive.

問5 A: Are you going to join the soccer club?

B:

A: That's wonderful! Practice starts at 4 p.m.

B: I'm looking forward to it.

- ① Yes, I think I will.
- ② Yes, but I don't want to practice.
- ③ I'm not sure.
- ④ The club practices a lot.

B 次の各日本語文に対応する英文にするため、それぞれ次の①～④の語を適切な空所に入れた際、～に入る最も適切なものを選び。ただし、文頭にくる語も小文字にしてある。

解答欄は、問1は、問2は、問3は

問1 あなたの助けがなかったらプロジェクトを成功させることはできなかった。

I couldn't _____ on the project without _____ .

- ① have ② help ③ succeeded ④ your

問2 あそこで多くの生徒に囲まれているのは私の担任の先生だ。

The person _____ many students over there _____
homeroom teacher.

- ① by ② is ③ my ④ surrounded

問3 今日できることを明日に先延ばしにしないで。

_____ put off tomorrow _____ you can _____ today.

- ① do ② don't ③ until ④ what

C 次の英文を読んで、後の問いに答えよ。

We were finally ready to begin our bicycle ride ケ the *Shimanami Kaido**, and the weather was going to be great; sunny and cool. For several years, Tom and I had talked about making a round-trip ride between Onomichi and Imabari, but we could never find a weekend when the weather was good, and we both had time off from work.

We started from Onomichi at 9:30 a.m. Riding at about fifteen kilometers an hour, we planned, with a stop for lunch, to get to the hot-spring resort in Imabari about seven hours later. The riding was easy in the morning, but difficult in the afternoon because of a strong headwind*. (x)On the bridges, we had to take care because they were so crowded with other cyclists, and even a few people walking. We arrived at the hot spring (y)on schedule, had a relaxing hot bath, and ate a delicious seafood meal. We went to bed early so that we could get an early start for the ride back to Onomichi, the next day.

When we woke the next morning, we found that the weather forecast had been wrong. It was stormy, with thunder, lightning, and strong winds. (z)Nevertheless, we decided to put on our raincoats and set out. It コ nine hours of cycling in the rain before we finally got back to our car. We were exhausted and wet, but it had been a thrilling ride.

(注) *Shimanami Kaido - しまなみ海道 (尾道市と今治市いまばりの間の島々を橋で結んだ道路)

*headwind - 向かい風

問1 空欄 ・ に入る最も適切な語を、それぞれ ①～④の中から1つずつ選べ。解答欄は、 ・

- | | | | | |
|--------------------------------|---------|-------|--------|--------|
| <input type="text" value="ケ"/> | ① along | ② by | ③ in | ④ off |
| <input type="text" value="コ"/> | ① had | ② let | ③ made | ④ took |

問2 下線部(X)に最も意味が近いものはどれか、次の ①～④の中から1つ選べ。
解答欄は、

- ① 橋がとても混んでいたため、他のサイクリストや歩行者を優先しなければならなかった。
- ② 他のサイクリストや歩行者もいて橋がとても混雑していたため、注意しなければならなかった。
- ③ サイクリストと一緒に歩いている人にも注意して運転したため、橋の上はとても混乱していた。
- ④ サイクリストや多くの歩行者で大変賑わっていたため、気を付けて橋を渡った。

問3 下線部(Y)の on と同じ意味・用法で使われているものを、次の ①～④の中から1つ選べ。解答欄は、

- ① Your keys are on the table.
- ② I went to the supermarket on foot.
- ③ The light in his room was on all night.
- ④ The meeting will start on time.

問4 下線部(Z)の Nevertheless と意味が最も近いものを、次の ①～④の中から1つ選べ。解答欄は、

- ① However
- ② Moreover
- ③ Somehow
- ④ Therefore

問5 英文の内容と一致しているものはどれか、次の ①～⑥の中から2つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答欄は、・

- ① トムと筆者は何年も前からしまなみ海道のサイクリングを計画していたが、都合がなかなか合わなかった。
- ② 往路は午前中向かい風で走るのが困難だったが、午後は楽になった。
- ③ 昼休憩を含めて約7時間かけて、今治の温泉地に到着した。
- ④ 今治に到着した日の晩と翌朝に温泉を楽しんだ。
- ⑤ 翌朝は天気予報通り天候が悪化したが、それでも順調に尾道まで戻ることができた。
- ⑥ 復路は悪天候の中を走り疲れ果てたので、行ったことを後悔した。

第3問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

かなり大きくなるまで、「うれしい」という言葉をなかなか口にすることができなかった。今になってみれば、あの時は充分にうれしかった、あの時もうれしいと言ってよかったのだ、などと思うのだが、それがどうしても言い難いのだった。

別に、よろこびの表明を惜しんでいたわけではないし、うれしがらせてくれた人に、そうと知られたくなかったわけでもない。どの程度の、どのような心の状態になったときにうれしいと言えはいいのか、その判断にまよっているうちについに言いそびれてしまう。それだけのことだった。

これくらいではまだうれしいと言ってはいけないのかもしれない。この程度だったら、もつと別の言い方になるのではないか。愚^ぐ々^ぐ々^ずしているうちに時は行き、相手は別の行動に移り、自分だけ取り残され、可愛^{かわ}げのない子と思われてはつが悪い思いもする。そんなことをずい分繰り返していた。

この^{とし}年齢になると、もう自分に対しても他人に対しても相当に厚顔しく(注1)なっていて、時には、うれしくなくはないけれども、うれしいというには少々寸足らず(注2)の時でも、あえて「うれしい！」と言って自他を演出する術^{すべ}にも通じ、またそれを正当化するだけの悪知恵もついている。

ろくにうれしいとも言えなかった者が、一体いつからこんなことになったのか。変化の時は、むろんはつきりとは分^{わか}らない。それに、うれしいという言葉に関しては、今言ったような経緯があつたけれども、他の言葉についてもすべて同様であつたかと言うと、そんなことはなくて結構自然に、また杜撰^{ずせん}にも使つていたと思う。

ただ、うれしいほどではなかったが、かなしい、たのしい、にくらしい、といった種類の言葉については、やはり言いよどむ(注3)ことが多かった。理由はうれしいの場合と同じで、別の種類の言葉よりも、使い始めた時期はずっと遅れている。

また、うれしい、かなしいを、更に分けて振り返ってみると、自分なりに口にしようとか、作文や手紙の中におおうと覚悟したのは、うれしい系統よ

りもかなしい系統のほうが早かった。鈍感な女の子とも、素直でない子とも思われたらしいが、口に出せない心のうちはかくの次第であった。

事や物を言い表すのに、何々は何々である、というかたちと、何々は何々ではない、という二つのかたちがあるだろう。

ずっと後になつての考えであるが、この二つのかたち自体に優劣をつける必要はないけれども、前者よりも後者のほうが表現が楽だと思ふことは何度かあった。しかしまた事柄によつては、安直でも卑怯ひきょうでもなくて、後者のかたちしかとれない表現の場合もあるということにも気がついた。

かなり大きくなるまでの、うれしい系統とかなしい系統の言葉遣いのことを、自分の傾向を知るために、私は時折、この表現のかたちに結びつけて考くえてみることもある。うれしい系統は前者に、かなしい系統は後者に属するというのはごく大雑把な見方に過ぎないが、今の自分は、できるだけ前者のかたちを心がけたいと思つている。

後者の誘いもお新鮮である。しかしたとえば、「うれしい」は「かなしい」を含んで矛盾せず「かなしい」にまで及ぶのに、「かなしい」に「うれしい」は入らない。こういうことが、私にはだんだん見過みすぎせなくなつて来た。

(竹西たけにし寛子「喜怒哀楽」による)

注1 厚顔こうがんしく…厚かましいこと。

注2 寸足らず…程度が足りないこと。

注3 言いよどむ…ためらつてすらすらと言葉が出ないこと。

問1 本文の「うれしい」についての記述として、最も適切なものはどれか。

次の①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、

ア

- ① 私はかなり大きくなるまで「うれしい」という言葉をなかなか口にすることができなかったが、それは自分が可愛げのない子であったからだと大人になって気がついた。
- ② 今となつては「うれしい」と言つてよかつたのだと思うようになったが、昔はこの程度では言つてはいけないなどと考えているうちに取り残されて、そのまま時間が過ぎてしまつていた。
- ③ 私は言葉の使い方について日頃から深く考える癖があり、「うれしい」に限らずどんな言葉に対しても自分の気持ちを一番表す言葉かどうか考えてしまうので、使うのに躊躇してしまふ。
- ④ 齢をとつたため自分に対して厚顔しくなつて、ようやく全くうれしくもないのに、演技で「うれしい！」と言えるようにまでなつたことに恥かしさを感じている。
- ⑤ 齢をとつたからか、他人が「うれしい」とか「かなしい」などの言葉を使つているのを聞くと様々な気づきがあり、それらに驚きを感じたり、見過ごせない思いをしたりしている。

問2 傍線部「私は時折、この表現のかたちに結びつけて考えてみるこ
 がある」について、筆者が結びつけているものを文章中の表現を用いて
 表にしてみた。空欄A～Fに入る言葉の最も適切な組み合わせを次の
 ①～④の中から一つ選べ。解答欄は **イ**

	表現のかたち	考え
前者	何々は何々 (A)	(B) 系統 □にしたり、作文で使ったりするのが (C)
後者	何々は何々 (D)	(E) 系統 □にしたり、作文で使ったりするのが (F)

- ① 前者―A である B たのしい C 遅かった
 後者―D ではない E にくらしい F 早かった
- ② 前者―A ではない B たのしい C 早かった
 後者―D である E にくらしい F 遅かった
- ③ 前者―A である B うれしい C 遅かった
 後者―D ではない E かなしい F 早かった
- ④ 前者―A ではない B うれしい C 早かった
 後者―D である E かなしい F 遅かった

第4問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

自然科学は、自然の本態と、その中にある法則とを探求する学問である。

しかしその本態とか、法則とかいうものは、あくまでも科学の眼を通じてみた本態であり、また法則である。それで科学の **X** は、自然と人間との協同作品である。

もし自然界に、人間をはなれて、**X** というものが、隠されているものならば、それを発掘すれば、それでおしまいである。もちろん宝はたくさん隠されているので、一ぺんでおしまい、ということはない。しかし数多くの宝の中から、一つずつ見つけていけば、手の中に握った **X** が、だんだんふえていき、未知の分が、それだけ少くなる。もしこういうものならば、科学はいつかは、宇宙の **X** を全部見つけ出してしまうであろう。

しかし科学の **X** が、自然と人間との協同作品であるならば、科学は永久に進化し、変貌していくものである。このいずれの見方をするかは、趣味の問題である。「いつかは」といっても、「永久に」といっても、内容は同じことである。

自然と人間との協同作品といったが、この場合の人間というのは、科学的思考力のことである。もっと普通ない方をすれば、現在(注1)の科学の眼を通じて自然を見て、すなわち現在の科学の方法によって、自然界から認識を抽出して、それを科学の対象としているのである。

この場合に使われる方法の基本的なものは、分析と総合、因果律的思考、測定、恒存(注2)の概念などである。こういう方法によって、自然界から認識を抽出する場合に、土台としているものは、**Y** の原則である。同じことをくり返せば、同じ結果が出るという前提のもとで、真偽を区別している。ちがった結果が出れば、それを誤りとするのである。

もつとも、同じことをくり返せば、同じ結果になるのは当然ともいえるが、問題は、同じことをくり返すことが、実際には不可能であるという点にある。どんなに条件を一定にしても、少くも時はちがっている。しかし現象を時の流れとして見るのは、歴史的な見方である。時の流れとは無関係に、法則が

あるとして、それを探るのが、科学である。

幸いにして自然界には、Yの原則が、近似的に成立する現象が多いので、そういう現象が、科学の対象として、取り上げられている。そのYの原則が近似的にあてはまる現象というのは、どういう現象かといえば、その一つの特徴は、「安定」な性質である。安定というのは、広い意味に使っているので、^{フラクチュエーション}偏差（注3）の影響が小さいという意味である。

自然界にあるものにも現象にも、必ず極微の偏差が伴っている。その一例として、結晶の性質を考えてみよう。結晶は、原子が格子をつくって、規則正しい配列をしているものである。X線の干渉を使えば、その格子の形や大きさは、くわしく調べることができる。そして塩の結晶ならば、塩素原子とナトリウム原子とが、立方体の格子の角々に、交互に配置されていることが分^{わか}っている。しかしこの配列は、理想的に完全なものではあり得ない。もし理想的に完全な配列をしていれば、この結晶は、どんな力を加えても、こわすことができないはずである。ある原子配列面でこわれるのと、全く同じ理由で、他の原子配列面でもこわれなければならない。それで、^A理想的に完全な結晶を引^ひつ張ると、ある限界まではもっているが、その限界を越した瞬間に、原子の大きさの程度に、粉々になってしまうなければならない。しかし実際には、最も完全と思われる結晶でも、どこかでこわれるのであつて、そこに極微の弱点があつたのである。こういう極微の弱点は、近代の物性論では、転位または結晶欠陥と呼ばれているが、そういう欠陥のあるものが、「完全な結晶」であつて、それもないものは、頭の中で考えた結晶である。

普通の歪^{ひず}み程度では、この弱点はあまり効いてこないで、すなわち偏差の影響が小さいので、前の定義でいえば、安定な現象である。しかしこの結晶がこわれるときは、極微の弱点のところから、こわれ始める。そしていつたんこわれ始めると、そこがますます弱くなつて、破壊が進行する。それで破壊の現象では、極微の弱点が重要な要素として、現象を支配する。前の定義でいえば、不安定な現象である。

こういう不安定な現象は、現在の科学では、その本質上、取り扱いかねる現象である。結晶でさえそうであるから、普通の物質では、なおさらのこと

である。できるだけ均質な物質の棒をつくって、それを曲げる場合、どこが折れるかということは、現在の科学では、まだ予言ができない。大気中の渦なども、不安定な現象である。それで、「火星へ行ける時代になっても、テレビ塔の天辺から落ちる一枚の紙の行方を予言することはできない」のである。この点に、^B科学の強力さと、その限界とがある。

^Yの原則が、近似的に適用される場合でも、科学の基本的な方法を用い得る範囲は、現象によつて、みな異なる。たとえば、生命現象の研究では、生命力が営む物理化学的現象は、分析と総合の方法が、比較的広い範囲に適用されるので、その方面の研究は長足に（注4）進歩する。しかし生命そのもの、あるいは本能のような問題は、なかなか解けない。将来、本能のことが全部分る日がきたら、それは生物体内の物理化学的現象と本能との間の関係が、分つたときであろう。

物の量を数であらわす方法、すなわち測定も、重要な基本的方法であるが、この測定には、常に精度の限界がある。自然の本性から考えて、精度はだいたい六桁あるいは七桁どまりのように思われる。現在のところは、一番精度が高い測定の一つとされている天体観測でも、二百年以上の周期をもっている彗星と、永久に帰つて来ない彗星との区別はできない。測定には必然的に伴う誤差の点からみても、科学の力には限界がある。しかし考えようによつては、二百年先までならば、正確に分るということは、たいへんなことである。

科学で使われている基本的な方法は、問題の解答を受け入れる見方にもある。^C科学という法則には、統計的の意味が常に含まれている。原子の性質といつても、同種の多くの原子について、その性質を平均したものを指している場合が、ほとんどである。霧函や原子乾板（注5）の方法では、個々の粒子の性質が調べられるが、それは飛跡から得られる知識に限定されている。

この見方の問題を忘れると、科学の力を過小評価したり、過大視したりすることになる。科学がいかに進歩しても、人間の寿命を予言することはできない、というようなことがよくいわれる。しかし国民全体としてみた時には、人間の寿命は、原子の崩壊などよりも、よほどよく分つている。人間の場合は、統計の中の個を問題にするので、その寿命が予言できないのである。科

学の法則は、統計の中の個には適用されないのが原則である。

以上のような考え方をしても、何も科学の力を過小評価することにはならない。三十年くらい前の話であるが、ボーア（注6）の原子構造論が、一応の完成を見、電磁波の方も、普通の電波からガンマ線までの連絡がついた時代のことである。ラマン（注7）が分子と光との干渉現象を発見し、コムプトン（注8）が電子と光との衝突作用を見つけ出した。これで電波のことも、物質のことも、物質と電波との干渉の問題も、全部片づいたように見えた。その頃の話であるが、ある人がチャドウィック（注9）に「これで原子論方面の問題は、一応片づいたようなものですね」といった。そしたらチャドウィックは「まだたくさんすることはあるよ。There is a lot of things to do.」と答えたそうである。その後数年にして、チャドウィックは中性子を発見した。それが今日の原子核物理学の一つの礎石になったのである。

今日われわれは、科学はその頂点に達したように思いがちである。しかしいつの時代でも、そういう感じはしたのである。その時に、自然の深さと、科学の限界とを知っていた人たちが、つぎつぎと、新しい発見をして、科学に新分野を拓いてきたのである。科学は、自然と人間との協同作品であるならば、^Pこれは永久に変貌しつづけ、かつ進化していくべきものであろう。

（中谷宇吉郎『科学の方法』による。出題の都合上、省略した箇所がある）

注1 現在：この文章が発表された一九五八年時点をさす。

注2 恒存：ここでは、物質とエネルギーの量の和が一定に保たれること。

注3 偏差^{フラクチュエーション}：Fluctuation は「変動」や「揺らぎ」などをさす。

注4 長足に：短期間で大幅に。

注5 霧窗や原子乾板：どちらも電荷を帯びた粒子が飛んだ跡を検出する装置。

注6 ボーア：一八八五―一九六二。デンマークの物理学者。

注7 ラマン：一八八八―一九七〇。インドの物理学者。

注8 コムプトン：一八九二―一九六二。アメリカの物理学者。

注9 チャドウィック：一八九一―一九七四。イギリスの物理学者。

問1 空欄 **X** ・ **Y** に入る語句として最も適切なものを、次の

①～④からそれぞれ一つずつ選べ。解答欄は、空欄 **X** は **ア**、
空欄 **Y** は **イ**

X ① 真理 ② 対象 ③ 経験 ④ 世界

Y ① 自然選択 ② 再現可能 ③ 仮説検証 ④ 精密観察

問2 傍線部 **A** 「理想的に完全な結晶」とはどのような結晶か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、**ウ**

① 極微の弱点をもつが、大体において規則正しい整った原子配列をもつ結晶。

② 歪みが小さいために偏差の影響を受けていない、安定的で壊れにくい結晶。

③ 完全に規則的な原子配列をもち全く欠陥のない、現実には存在しない結晶。

④ X線の干渉によって、格子の形や大きさを詳しく把握することができる結晶。

⑤ 極微の弱点が重要な要素になって次々と破壊が進行する、不安定な結晶。

問3 傍線部B「科学の強力さと、その限界」とあるが、この説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、

工

- ① 火星に行くという壮大なことも科学の力で実現可能だが、それは高所からの紙の落ち方を調べるような地道な研究の積み重ねがなければできないということ。
- ② 高い技術を必要とすることでも安定な現象にもとづくものなら達成できる可能性があるが、不安定な現象では身近な事象も説明できないということ。
- ③ 技術開発によって火星への到達はできる可能性があるが、予言は科学の主要な目的でないためテレビ塔から落ちる紙の行方は予言できないということ。
- ④ どこをとつても均質な棒を作るような高度なことは現在の技術で可能だが、それが折れる仕組みは現在の科学技術でも解明されていないということ。
- ⑤ 科学者の関心が宇宙開発に向いているため宇宙での技術開発は急速に進む可能性があるが、逆に地球上の身近な現象の研究は進まないということ。

問4 傍線部C「科学でいう法則には、統計的の意味が常に含まれている」
について説明したものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から
一つ選べ。解答欄は、

オ

- ① 科学の法則は科学の進歩によって次々に作られるがあくまで計算による机上の理論であるため、日常的な現象を説明することはできないということ。
- ② 科学の法則は数学的な処理にもとづいたものであるため、数値化しにくい人間の寿命や原子の崩壊については扱うことができないということ。
- ③ 科学の法則は霧函や原子乾板などの機器で測定して得た数値をもとに作られるので、機器で測定できない人間の寿命は法則化できないということ。
- ④ 科学の法則は同種のもの性質を平均して扱うため、集団全体には適用できるが集団の中における個々のものには適用されないということ。
- ⑤ 科学の法則は常に厳密な計算式によって打ち立てられるので、基本的には法則で取り扱われるすべての事物に対して有効であるということ。

問 5 傍線部 D 「これは永久に変貌しつづけ、かつ進化していくべきものであろう」とはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、

カ

- ① 科学は豊かな自然の中から一つひとつ事実を発見していく作業なので、新分野を開拓していくことで未知のものを減らし既知のものを増やすことができるだろうということ。
- ② 科学は未解明のものを明らかにすることによってその力が適正に評価されるので、身の回りに未解明のものがいないか常に注意して探すべきだろうということ。
- ③ 科学は各時代の見方で自然界から認識を抽出して対象とするので、自然の深さと科学の限界を知り新たな見方により自然をとらえ直すことで発展し続けるだろうということ。
- ④ 科学はどの時代でも最高水準を目指しているがその成果は常に更新されるものなので、現状に満足せずに次々新しい発見をするように努めるべきだろうということ。
- ⑤ 科学はその限界を知ることによって発展するものなので、科学にできないことを理解することで飛躍的な技術開発が期待されるだろうということ。

問 6 本文の特徴について説明したものとして適切ではないものはどれか、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

キ

- ① 具体例を用いて抽象的な考え方を説明している。
- ② 冒頭と末尾を対応させた構成で全体の統一を図っている。
- ③ 擬古文的な文語体を使って重厚さを出している。
- ④ 簡潔な文末表現を多用して断定的に述べている。

第5問 次の小説を読んで、後の問いに答えよ。

明治二十一年の春。東京で写真館を営む小川一眞の元に、宮内省の図書頭、九鬼隆一が訪ねて来た。宝物調査を行うため、記録の仕事を一眞に頼みたいというのだ。米国に留学までした一眞だが、仕事に行き詰まりを感じており、即座に了解した。旅程は和歌山や京都、奈良と畿内を巡る長旅であった。調査隊を率いる九鬼と、その部下である美術学校の岡倉覺三（岡倉天心）、フェノロサ、その他、画家、彫刻家、役人、新聞記者などが連れ立った。以下は、高野山での調査の場面である。

米国人の帝国大学教授アーネスト・フェノロサは、日本の美術研究の第一人者であるらしい。覺三と共に調査隊に参加しており、法隆寺の秘仏の扉を最初に開けたのも、フェノロサと覺三であると聞いていた。

ただ一眞は、どうにもこの異人（注1）の男が苦手であった。

一眞は英語も堪能であり、米国に渡った経験もあることから、異人に対して他の日本人よりも慣れているという自負がある。差別をするつもりなどないと思っていた。しかしその一方で、我が国の宝物の調査において、異人の手を借りなければならない理由が、一眞にはどうにも腑に落ちていない。

「何だつて、貴方のような異国から来た人が、我が国の宝物を調べているのでしょう」

一眞は（Ⅰ）直に本人に尋ねてみた。するとフェノロサは軽く肩を竦めた。

「それは私がこの国の美術を愛しているからですよ」

銜いもなく（注2）言う。

「愛ですか……」

異人はよくその言葉を使う。米国にいた時にも「LOVE」の使い方について一眞は凡そ理解に苦しむことも多かった。明け透けに、外側から降り注いでくる熱のようなその言葉の意味が、今一つ分からないのだ。

高野山での調査は五日間に及んだ。終わりに近づいた時のこと。一眞は一体の不動尊像（注3）を前にカメラを構えた。暫く（Ⅱ）見ていたのだが、像に向き合った時に（Ⅲ）睨まれているような力を感じる。ファインダー

の向こうに焔^{ほむら}が立つような感覚だ。生きているものを撮っているわけではない。動くわけもない「物」に對峙^{たいじ}しているはずなのに、シャッターを切るタイミングが掴^{つか}めない。

「どう撮りますか」

いつものように一眞の背後に立ったフェノロサが（Ⅳ）そう問いかけた。

この異人はカメラを知らないのかと思った。これまで散々、人の仕事を覗^{のぞ}き込むように見ていたのはそのせいであつたかと得心^{とくしん}もした。

「ガラス乾板^{かんぱん}を取枠^{とりわく}に仕込んだら、暗箱^{あんきょう}に入れ、像を結んだところでシャッターを切るんです」

一眞は手際よく取枠を仕込みながら、仕組みを解説しようとする。すると「NO」と一眞の説明を遮った。

「そうではないのです。貴方はこれをどのように写真に収めるつもりなのか、聞きたいのです」

一眞は怪訝^{けげん}な顔でフェノロサを見た。フェノロサは一眞に己の意図が通じていないと分かつたのか、ううん、と唸^{うな}りながら言葉を探す。

「貴方のIDEAが知りたい」

「IDEA」

一般には「考え」「着想」といった意味であろうと思つてはいたのだが、どうもフェノロサの語り口はその意味ではない。岡倉覚三に尋ねると、ああ、と得心したように頷^{うなづ}く。

「彼が言うIDEAはもう少し違ふ。私は妙想^{みょうそう}と訳すのがよからうと思つている」

覚三は字を記して見せた。覚三の訳によつて、より一層、分からなくなった。どうにも一眞にとっては言語化して捉えるには難しい概念らしく、フェノロサが一眞の「妙想」とやらを知りたいと言つたとて、写真は写真としか言いようがない。

「貴方は美術は好きですか」

フェノロサに問われ、一眞は、

「無論」

と答えた。ボストンにいる時には、友人たちに誘われてボストン美術館に度々足を運んだ。古今東西の絵画や彫刻に触れ、大いに識見を広めたと思っている。

「写真も美術なのです」

フェノロサは言う。

いや、それは違うだろう……と、一真は思う。

写真は技術の集積であり、実験の賜物^{たまもの}であった。正確に記録をし、はっきりとした色で現像（注4）する。そのために試行錯誤を繰り返してきた。

名勝（注5）を写真に収めることもあるが、ありのままを写し出すことに意味がある。肖像としても、その姿を描くよりも正確に、真影を写すことが大切なのだと思う。それには写真師の技術が大切であるが、主観はいらないし、ましてや「IDEA」は要らない。

一真はフェノロサの言葉を軽くいなして、改めて不動尊像に向かつてカメラを構える。しかしフェノロサは、一真の後ろに立ち、尚も言葉を紡いだ。

「この宝物調査において大切なのは、目の前の絵や建物や仏像が、この国の宝であると知らしめることです。私たちが勿論^{もちろん}、言葉を尽くします。また、記者の方々も画家の方々もこれらが美しく貴重であることを伝えます。同じように貴方も、これらに対する思いを写して欲しい。大きさは測りますから問題ありません。もちろん、記録も大切です。しかしそれ以上に貴方にとっての宝物を伝えるために撮って欲しい」

B 一真はいら立ちを覚えて眉を寄せる。

「私は一流の技術者であるが、画家でもなければ彫刻家でもない。何をもって美術と呼ぶんだ」

すると、フェノロサは首を傾げた。

「ならば何故、境内の片隅に打ち捨てられた仏像まで、写真に収めていたのですか。それも、とりわけ丁寧に」

寺を巡っていると、あちこちに壊れた仏像があった。腕が挽がれ、時には頭が落ち、砕かれた木片になっているものもある。同行していた彫刻家の

加納鉄哉は、その有様を見てさめざめと泣いていた。新政府が立つ御一新(注6)以前には仏師をしていたという加納にしてみれば、身を挽かれる思いであろう。一真も素通りできずに、カメラを構えていたのをフェノロサに見られていたのだ。

「貴方は撮ることで、何かを伝えたいと思つたのではありませんか」

伝えたいというほどのものではない。

これまでの一真であれば、打ち捨てられた仏像は、新時代にそぐわないものであつたからだとして無視してきたかもしれない。しかしふと、これらの仏像の残骸は、新しい時代の中で光を追い求め続けて来た一真にとって、振り返ることのなかつた「影」なのかもしれないと思つたのだ。

フェノロサは口を噤む一真に向かつて言い募る。

「貴方は、胸の内にあるものを、写真という形で表すことができる。ここにある物の真の価値を、今の政府や海外にまで伝えることができる。それが、宝を守ることに繋がるのです。貴方の心にあるIDEAを見せて下さい」

高野山での調査を終え、一行は次の調査地へと向かう。その道中、一真はフェノロサの言葉に苛立ちと反発を覚えていた。しかし、旅を続けて二月が経ち、奈良へ入る頃になると、少しずつ意識が変わり始めていた。

「或いは、あの男の言うIDEAが、俺の写真に欠けていた何かなのだろうか」

自信のあつた作品が銀牌(注7)に終わつた理由。そして今、行き詰まりを感じている理由。

「どうせなら、やってみよう」

一真は意を決して、一行と共に訪れた興福寺でカメラを構えた。

そこにあつたのは「無著像」である。いかなる物語を持つ像なのか知らないが、物として「在る」のではなく、静かに佇んでいるように見えたのだ。

「どう撮るか」

一真は自らそう問いかけた。

無著というのが、法相宗(注8)の源であるインドの祖師であり、これを彫つたのが鎌倉時代の仏師、運慶であるという話を聞いたが、一真にとってはそ

の解説よりも目の前の佇まいがあまりにも雄弁に思われた。

時代を越えてきているのだ。素直にそう思えた。

そしてその越える力は何なのかを考えた時、或いは作り手である仏師の「IDEA」なのかもしれないと思えた。ただ人型をなぞったのではない。そこに込められたものに、一眞は心を動かされたのだ。

一眞は無著像に肉薄した。像全体ではなく、ぐつとカメラを近づけて斜めから撮る。すると像に当たる光の角度は変わり、表情を象る陰影が変わる。静かな眼差し先の先に何があるのかを語り掛けるような顔立ちに見えるのだ。

一眞は「今だ」と思った瞬間にシャッターを切った。

珍しく黙って見ていたフェノロサは、写真の出来上がりも見えていないのに、

D 「良いものが撮れましたね」

と言う。一眞は素直に頷けず、

「さあ、どうでしょうな」

と答えた。現像してみなければ、写真の良し悪しなど分かるはずもない。そう言いたかったのは、フェノロサに対する対抗心に似た思いからであつたらう。

しかし、それからというもの、旅の道中で出会う像の一つ一つに向き合うことが面白くなってきた。

米国に渡り、新しい技術を学んだ時、日蝕の撮影をした時、光を目指して走って来た。しかし今回は少し違う。分かりやすく煌々とした光が見えてくるわけではない。辺りの光を吸い込んでいく煉けた木像の中に潜む、小さな光を覗き込む作業だ。しかし、影を深く刻む像を象る光を見出し、それを写した瞬間に、言い知れぬ高揚を覚え始めていた。

(永井紗耶子『秘仏の匣』による)

注1 異人：外国人のこと。差別的な意味合いの含まれる場合があるが、明治期では使われることがあった。

注2 衒いもなく…ここでは「恥ずかしがる様子もなく」の意。

注3 不動尊像：密教の不動明王を表す彫像。炎を後ろに背負い、右手に剣、左手に繩を持ち、怒りの形相をしている。

注4 現像：撮影したフィルムを薬品で処理し、映像をあらわし出すこと。

注5 名勝：景色の優れた地のこと。

注6 御一新：明治維新のこと。

注7 銀牌：以前出品した作品が一等ではなく、二等の受賞であったこと。

注8 法相宗：興福寺・薬師寺を中心とした奈良仏教の一宗派。

問1 空欄（Ⅰ）～（Ⅳ）に入る語句の組み合わせとして最も適切なもの

のを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

ア

- | | | | | |
|---|--------|--------|----------|--------|
| ① | I ふと | II じつと | III ぐつと | IV 不意に |
| ② | I きつと | II はつと | III 突然 | IV ふと |
| ③ | I 何げなく | II きつと | III 不意に | IV じつと |
| ④ | I そつと | II ずつと | III じろつと | IV 気軽に |

問2 傍線部A「明け透けに、外側から降り注いでくる熱のようなその言葉」

の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、

イ

- ① 能天気深く考える様子もなく、曇みかけられる言葉のこと。
- ② 露骨に遠慮なく、相手から一方的に思いを伝えられる言葉のこと。
- ③ 無理に明るく振る舞った様子で、相手から言われる言葉のこと。
- ④ 周囲にみせびらかすように、情熱的に訴えかけられる言葉のこと。

問3 傍線部B「一眞はいら立ちを覚えて眉を寄せる」とあるが、どうしてか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、

ウ

- ① 一眞にとって写真を撮ることは自分のアイデンティティであるのに、フェノロサはそんなことは無視して自分がやりたいように宝物調査の方針を押し付けてくるから。
- ② 一眞は米国で学んだだけあって自分の撮る写真は一流だと自負していたのに、フェノロサは写真は記録が大切だと言い張り一眞の思いを全く理解しようとしなから。
- ③ 一眞は写真とはいかに被写体を正確に写し出すかが大事であると考えているのに、フェノロサは被写体に対する思いを映すようにと言い続けてくるから。
- ④ 一眞は留学までして技術を磨いたプロの写真家なのに、写真のことがまるでわかっていそうもないフェノロサに技術などは関係ないと言いつけられたから。

問4 傍線部C「貴方の心にあるI D E A」とはどういうもののことか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

エ

- ① 被写体に没入し向かい合って対話をした結果、心に感じ取ってつかんだもののこと。
- ② 細かい所までじっくりと観察し、被写体に込められた作り手の思いを想像したもののこと。
- ③ 被写体の作られた背景や作り手のことを理解し、そこに込められた意図を盗み取ったもののこと。
- ④ 写真家としての矜持まもどにより、画家や彫刻家と同じく被写体を撮りたように表現したもののこと。

問5 傍線部D「『良いものが撮れましたね』と言う」とあるが、フェノロサがそう言ったのはどうしてか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

オ

- ① 一真が写真の出来映えに対して不安そうだったので、良いものが撮れたと褒めて自信をつけさせたかったから。
- ② 自分は助言せず黙っていたので、一真が迷いを捨てて被写体に対峙して撮ろうと決意したと感じられたから。
- ③ 写真の仕上がりを見てみないとわからないが、一真の満足そうな笑顔を見て良いものが撮れたとわかったから。
- ④ 一真が仏像に込められたものを自分で感じ取り、それをつかんで写真を撮ったと見て取ったから。

問6 今回の宝物調査の旅において、一真の内面はどのように変わったと言えるか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、

カ

- ① 米国で学んだ撮影技術に全く疑いを持っていなかったが、被写体に肉薄するという独自の新しい撮影技術を手に入れる可能性を実感できた。
- ② いかにも忠実に被写体を写し取るかが写真を撮る際には大事であると考えていたが、自身の心の赴くままに撮ればいいのだという確信を得た。
- ③ 新時代の中で明るい光を追い求め続けてきたが、被写体に潜む振り返りもしなかつた小さな光を見出すことに喜びを感じるようになった。
- ④ 一等が取れなかつたのは試行錯誤が足りないからだと思っていたが、被写体が背負っている歴史を見出すことがまず大切なのだと悟った。

問7 この小説における文章表現の特徴として、適切ではないものを次の

①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、

キ

- ① フェノロサと一真の会話により物語が進行することで、軽快で明るい雰囲気が生まれている。
- ② 「LOVE」「IDEA」などのアルファベット表記を使うことで、単純には訳せない、広がりのある意味が生まれている。
- ③ 「光」「影」などの隠喩により、写真家として一真が追い求めようとしているもののイメージを喚起する効果をあげている。
- ④ 「焔が立つような」などの直喩を用いることで、一真の感じ取ったものの様子がわかりやすくなっている。
- ⑤ 一真寄りの視点から登場人物の言動や思いを描くことで、読者がその状況を味わうことができ同化しやすくなっている。

〔基礎教養テストの問題は以上です。〕